

保育専攻学生による乳児保育実践学習と 乳児保育効力感との関連 2

The Relationship Between Practical Infant Care Implementation Efficacy and
Infant care Illustration Study in College Students Majoring in Childcare Part2.

加 藤 房 江
(こども学科 准教授)

要旨 本研究では、保育専攻学生に 3 地点で調査を行い、乳児保育実践学習の効果測定である乳児学習評価において、介入前から、介入中にかけて、値が向上し、有意に得点の増加が認められ、乳児保育のスキルが高められたことが明らかになった。乳児保育実践学習の 3 地点の得点に対し、クラスター分析（ユークリッド平方距離による Ward 法）を行った。その結果、クラスター 1：「得点成長群」・クラスター 2：「継続困難群」・クラスター 3：「挫折復活群」・クラスター 4：「実力不発群」の 4 つのクラスターを採用した。各クラスター（群）と 3 時点の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、3 時点の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び、困難希求、適切養護、言語的賞賛）の得点を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った。その結果、介入中の「得点成長群」は、「適切養護 2」の平均得点と、「継続困難群」は平均得点が 5% 水準で有意な差が認められた ($F(3, 104) = 3.23, p < .05$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ「得点成長群」は、「継続困難群」よりも得点が高まることが明らかになった。また、介入後は、「得点成長群」と「実力不発群」の「適切養護 3」の平均得点が 10% 水準で有意な傾向で有意であった ($F(3, 104) = 2.35, p < .10$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ「得点成長群」は、「実力不発群」よりも得点が高まる傾向があることが明らかになり、実践カード学習を活用した乳児保育実践学習の成績が良かった群は、乳児保育効力感の適切養護が上昇したことが明らかになった。

【キーワード：乳児保育 保育所実習 保育者効力感 学習評価 クラスター分析】

I. はじめに

保育専攻学生の保育スキルを高める試みとして、乳児保育の具体的な保育行為に沿った授業を行なうことで、乳児保育の効力感が高まるのではないかと考え、乳児保育の実践的な学習と乳児保育効力感の関連を明らかにするための研究が必要だと考えた。乳児保育のスキルの習得を捉える視点として、第 1 に「乳児保育効力感尺度」の作成¹⁾、第 2 に「乳児保育実践カード」の作成、第 3 に乳児保育実践カードを活用した授業の効果測定である乳児保育実践学習評価として「乳児学習評価」の作成を行った²⁾。

第 1 の乳児保育効力感尺度の作成の過程として、予備調査（保育所実習を終えた保育専攻学生 63 名を対象）の記述内容の特徴により生成した 8 つのカテゴリーと保育所保育指針解説・近年本邦で出版されている「乳児保育」の解説書、及び実

践カードの内容の具体的な保育行為が上手く出来るかどうかの項目を付け加え、乳児保育効力感の 50 の項目候補を作成した。専門家の協力を得て、検討を行った。因子分析および記述統計では、乳児保育効力感の 50 の項目候補について、天井効果・床効果を検討した。その結果、1 項目で得点の分布に著しい偏りがみられたので、分析から除外した。次に 49 項目候補について、因子分析（最尤法・Promax 回転）を行い、因子構造を検討したところ、1 因子性が高いものの、下位尺度同士が相関をもつというモデルを踏まえて 4 因子解を採用した。その後、繰り返し因子分析を行ったところ、最終的に 4 因子 39 項目となった。第 1 因子は、「表現遊び」と命名した。言葉でのコミュニケーションや関わり方が難しい乳児に対し、歌や手遊びなど女性の優しい声や身振りから、分かりやすく楽しく関わりをもつことが大切であると考えた。わ

らべうた・歌遊び・手遊びなどの表現を通し、体に触れてあやすことで、関わりやすくなることを反映した因子である。

第2因子は、「困難希求」と命名した。学生が実習などを通し、困難な状況に直面した時、指導者に自ら質問し、その状況を乗り切ることができることは、大切である。同時に、指導者からのアドバイスを活かしながら、より良い実習にしていこうとする姿勢や周囲の人と積極的に挨拶し、しっかりとコミュニケーションをとろうとする態度は、重要である。そのために因子としてまとめたと考える。

第3因子は、「適切養護」と命名した。乳児保育では、個人差をよく知り、一人一人の子どもの発達過程をよく理解して、援助することが大切である。食事や睡眠、排泄、感染症予防など、養護の面の保育スキルを理解するという方略を反映した因子である。

第4因子は、「言語的賞賛」と命名した。保育者は、ノンバーバルなコミュニケーションを含め、子どもの言葉を聞き取る力をもったよい聞き手であると同時に、子ども同士の会話を成立させるための役割を担うことで、子ども同士の意思の疎通が図れるようになっていく。保育のさまざまな場面により、子どもの気持ちに寄り添い、励まし、助言を行うための因子としてまとめたと考える。尺度の内的一貫性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、表現遊び尺度で.92、困難希求尺度で.89、適切養護で.89、言語的賞賛で.82と高く、満足し得る内的一貫性が認められた。

第2の乳児保育実践カードの作成の過程として、予備調査から得られたデータをKJ法に基づいて、分類を行い「コミュニケーション」「子ども同士のかかわり」「おむつ換え・排泄の援助」「遊び・表現」「食事の援助」「安全に関する対応」「着脱・清潔の援助」「睡眠時の援助」のカテゴリーを生成した。乳児保育実践カードの作成においては、今回生成したカテゴリーの内容や保育所保育指針解説・近年本邦で出版されている「乳児保育」の解説書を参考にした^{3) 4)}。また、学生からの保育所実習において困難さを感じた内容の克服方法について挙げられていた「歌や手遊びなど音から楽しむようにすること。」²⁾は、筆者が保育現場にて長年

勤務していた経験からも、有効と感じた内容であり、これらも反映させた内容となっている。以上から、ビジュアル的にも分かり易いカラーのイラスト入り、実践カードを活用してのロールプレイ形式の授業は、モデル経験の効果も期待できるものと予想される。38の保育場面での実践カードを「乳児保育実践カード」として作成した。

第3の「乳児学習評価」の作成の過程として、予備調査（保育所実習を終えた保育専攻学生63名を対象）のデータをKJ法に基づいて分類を行い、分類した8カテゴリーの内容や保育所保育指針解説等を参考に、40問の質問を○×形式で回答するものであり、1問1点の40点満点である。乳児学習評価1は介入前、乳児学習評価2は介入中、乳児学習評価3は介入後に実施するために3パターン作成し、すべてが同じ評価になるよう努めた。筆者以外の視点から確認するために、専門家の協力を得て検討し、評価の統一性が計られていることから、信頼性を確認した。

保育所実習において困難さを感じた理由については、言葉を発しない乳児とどのようにコミュニケーションをとっていったらよいか、子ども同士の関わりにおいての言葉がけや気持ちの代弁、乳児に対しての遊び方などが理由としてあげられた。その他は、食事や排泄、清潔、着脱などの養護に関する保育技術の内容になっている。言葉でのコミュニケーションのとりにくい乳児とのかかわり方や乳児保育のスキルアップのための、具体的援助方法を学ぶことが重要であることが推察された。

学生の乳児に対する理解や具体的援助方法の技術を高めるために、野中（2008）⁷⁾や船越（2010）⁸⁾の言うように、乳児保育の授業が、ビジュアル的にも分かりやすく興味のある内容として能動的に経験できることが大切である。

近年、保育能力向上に関して、「保育者効力感」という視点から検討した研究が増加傾向にある。この保育能力向上について、「保育者効力感」という概念が多様化する保育環境において、有効な保育を展開していく要因として指摘されている（田辺2011）⁹⁾。

Banduraは、自己効力感を形成するための情報源として、①「実際場面の遂行」②「代理的体験」③「言語的説得」④「生理・情動的側面」の

4つをあげており、個人自ら作り出すものであり、人の行動を決定する認知的変数と捉えている¹⁰⁾。

本研究で行う乳児保育実践学習は、②「代理的体验」③「言語的説得」が、関連すると思われる。②「代理的体验」は、モデルの類似性が高いと自己効力感に大きく影響し、モデリングは、課題の方略の性質についての情報も伝えるので、これも自己効力感に影響を与える。③「言語的説得」は、説得の方式を反復して用いることで、本人の努力と真剣な取り組みが導き出すことができる。それに加え、実践カードは、視覚的効果を含んでおり、相乗効果が期待できる。

田中(2006)¹¹⁾は、モデル経験の効果において、同学年生の前でモデルとして示範を経験させることは、示範内容の違いにかかわらず、学生の学習効果を高める可能性があることを示唆している。また、示唆する保育実技の種類に関わりなくモデルとして示範を経験することが、保育技術の準備、自己効力を高めることに効果があるとし、練習時間が長い程、また観察者の反応が良いと感じた程、示範を行った保育技術に対するモデルの自己効力の程度が高くなることを述べている。

以上から、ビジュアル的にも分かり易いカラーのイラスト入り、実践カードを活用してのロールプレイ形式の授業は、モデル経験の効果も期待できるものと予想される。実践カードの内容が、乳児保育の保育場面において、保育行動に直結した行為を考慮するもので、保育専攻学生が実習の場において、効力感を高めるものと思われる。

本研究における乳児保育効力感は、具体的な乳児を対象とした保育行為に沿った効力感を測定する尺度として作成した。このことから、乳児保育効力感尺度は、「保育専攻学生が保育所実習の乳児保育において、適切な保育行動が自分にできるかどうかという自己関連思考であり、乳児保育のある結果を生み出すために必要な行動をどれだけうまく行うことができるかという個人の確信である」ということを定義する。

実践カードにおいては、予備調査から得られた、3歳未満児において困難さや課題を感じたカテゴリーの中から、乳児保育の具体的保育場面を、手書きのカラー・イラスト入りで、38場面作成した。乳児保育の授業において、実践カードを

活用した授業を行い、これを手がかりに、学生同士がロールプレイ形式で演じ合いを行い、講義だけでは得られない、乳児に対する様々な保育場面での具体的なかかわり方を考え・学ぶことで、乳児に対する理解や具体的援助方法の技術を高めることである。

実践カードでは、困難さを感じる38の保育場面において、子ども達と分かりやすく楽しくかかわりをもつために、わらべうた・手遊び・言葉かけを含め、発達過程に沿った実践的でイメージしやすい内容を意識して作成している。具体的保育行為について、ロールプレイを通して、先生役・子ども役を見たり、体験することで、さまざまな保育場面の対応方法を学んでいくと思われる。

学生同士で、ロールプレイ形式で演じ合いを行い、分かりづらい部分や重要な部分は、説明し、強調して伝えることを繰り返し行うことで身に付けていくようにする。実践カードの中で、発展的なパターンが予測できる場面において、様々な保育場面でのかかわり方を考え、確認して活用する。

以上から、実践カードを活用した乳児保育実践学習では、学生の乳児に対する理解や保育実践力を高めることに繋がり、実習や保育の現場において、必要な保育行為が上手くできるかどうかという見通しや予測の認知として、保育者効力感に影響すると考えられる。

Ⅱ. 方 法

調査対象

A県内のC短期大学2年生の保育専攻学生の中で、保育所実習を希望している122名の内、介入前、介入中、介入後の3時点すべてに回答している108名を調査対象とした。

調査時期

(1) 研究全体のスケジュールおよびプログラムの日程

研究全体のスケジュールをTable 1に示した。平成28年6月中旬から、実践カード学習を受けた後の8月上旬、保育実習後半を経験した10月上旬から下旬に実施した。

介入前の調査では、6月中旬に乳児保育実践学習の効果測定である課題として、乳児学習評価1と乳児保育効力感尺度を配布し、実施した。

介入中の調査では、8月上旬に乳児学習評価2

と乳児保育効力感尺度を実施した。

介入後の調査では、10月上旬に乳児学習評価3と乳児保育効力感尺度、実習終了後振り返りシートを配布し、実施した。

(2) 倫理的配慮

調査は、筆者の授業終了後に実施した。いずれの調査も倫理的配慮として、「自由参加であること」「成績には関係ないこと」「個人情報厳守することを説明する」をフェイスシートに記載し、口頭でもそれを伝える。介入前、介入中、介入後の計3回の比較が必要となるため、氏名の頭文字と学籍番号の下3桁の記述を依頼し、プライバシーの保護に努めることを口頭で伝えた。

乳児保育実践カードの学習方法

実践カードの作成においては、予備調査の結果から、保育所実習において、3歳未満児に困難さや課題を感じているカテゴリーの内容を反映させた。また、保育所保育指針解説・近年本邦で出版されている「乳児保育」の解説書を参考に作成した。学生達が乳児保育に興味をもち、具体的・実践的でイメージしやすく楽しく感じるようにカラーのイラスト入りで、手書きにて筆者が作成した。「乳児保育実践カード」38枚の保育場面でのかわり方のカード作成を行った。子ども達に分かりやすく楽しくかわりをもつために、わらべうた・手遊び・言葉がけを含め、発達過程に沿った実践的でイメージしやすい保育スキルが獲得できることを意識して作成した。

実践カード学習については、平成28年7月中旬から、平成28年9月上旬の保育所後半実習開始までの乳児保育の授業にて、乳児保育実践カード学習は、4コマであった。1コマ目の乳児保育の授業の前に、筆者の他の授業内に乳児保育実践カードを縮小したプリントを配布し、活用の概要を説明し、予習をしておくよう伝える。乳児保育実践カード学習をしている期間は、乳児保育実践カードは自由に見られる状態にしておいた。1コマ目は、乳児保育実践カードの内容のレクチャーを行った。分かりづらい部分やわらべうたのメロディー、重要な部分は筆者が、説明・確認・補足しながら、繰り返し行った。

一通り、乳児保育実践カードの内容のレクチャーが終了したところで、裏面の発達過程の記

載してある「おおむね6ヶ月」などを上にして、保育内容の記載してあるカラーのイラスト面を下側に伏せておく。トランプの神経衰弱をするような常態で、学生自身が実践カードを引いていくようにし、選んだ実践カードの内容が、ロールプレイ形式で演技合いを行うテーマとなるようにした(2人組か、テーマにより複数で行う)。

自分の引いた乳児保育実践カードの内容を2コマ目から4コマ目の授業内で演じるため、各自の保育内容の学びを自分のものになるよう深め、学生同士で演じるための準備を進めていくように伝えた。乳児とのコミュニケーションとしてのわらべうたや手遊びでは、学生がロールプレイをした後全員で、保育現場でも再現できるように何度か繰り返し歌ったり、遊んだりした。養護の保育場面では、重要な部分は筆者が、説明・確認・補足しながら、進め、発展的なパターンを予測したり、それについての対応の仕方を話し合ったり、様々な保育場面でのかわり方を考えるなどして活用していった。

Ⅲ. 結 果

乳児保育実践学習の効果測定である乳児学習評価を比較するために、実践カード学習の介入前、介入中、介入後の3回に分けて測定を行った。Table2は、介入前(2)-1、介入中(2)-2、介入後(2)-3の乳児学習評価の平均得点と標準偏差を示したものである。Figure1は、乳児学習評価の平均得点の結果を示したものである。Figure2は、乳児学習評価の個人の得点の推移を表したものである。

乳児学習評価の介入前、介入中、介入後の得点に差があるかどうかを検討するために、時期〔介入前(2)-1、介入中(2)-2、介入後(2)-3〕を独立変数とした1要因被験者内分散分析を実施した。その結果、時期の主効果が認められた($F(2, 214) = 339.96, p < .01$)。Bonferroniの方法による多重比較の結果、すべての時期において1%水準で有意であった。介入前(2)-1の乳児学習評価1の平均値は27.15、介入中(2)-2の乳児学習評価2の平均値は35.06であり、介入後(2)-3の乳児学習評価3の得点は33.70であった。介入前から、介入中にかけて、得点が高く伸び、介入中から介入後にかけて緩やかに得点が低下している。介入前

の得点よりも、介入後は高い値を維持している結果となった。

Table 1 本研究の手続き

時期	6月中旬	6月下旬～ 7月上旬	7月中旬 ～8月上旬	9月上旬～ 9月下旬	10月上旬 ～下旬
使用尺度	(1) 乳児保育効力感		乳児保育効力感		乳児保育効力感
評価	(2)-1 実践学習確認評価 1		(2)-2 実践学習確認評価 2		(2)-3 実践学習確認評価 3
			(3) コーピング尺度		(4) 実習終了後振り返りのシート
乳児保育 実践学習		乳児保育実践カード の授業			
実習		保育所実習①		保育所実習②	

Table 2 各乳児保育実践学習評価の平均と標準偏差

		介入前	介入中	介入後
テスト得点	<i>N</i>	108	108	108
	<i>M</i>	27.15	35.06	33.70
	<i>SD</i>	2.98	2.58	2.61

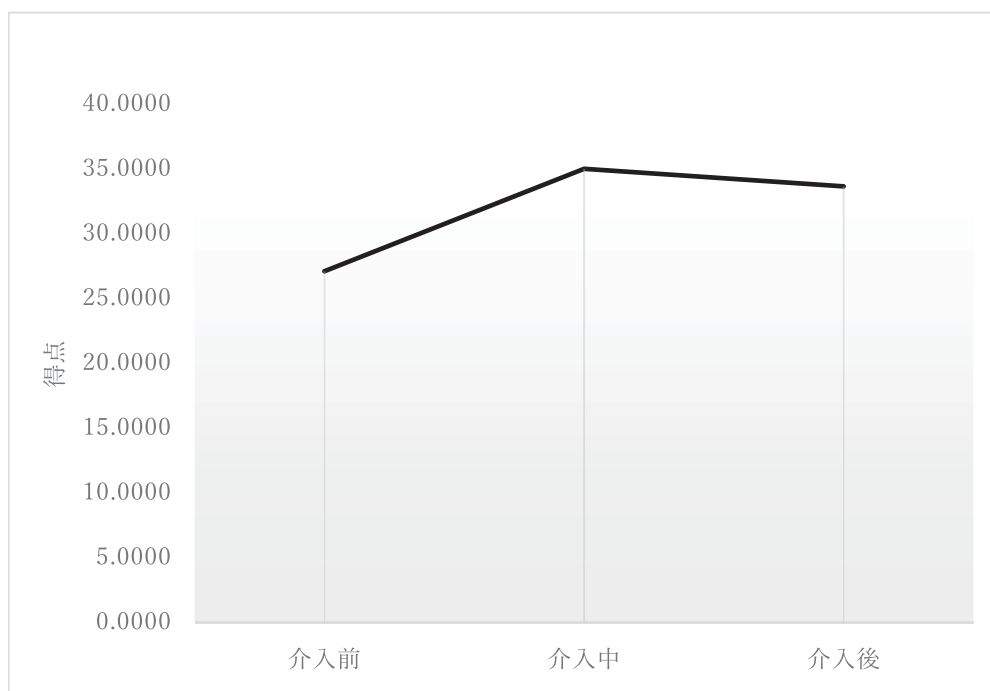


Figure 1 各乳児保育実践学習評価の平均得点 (N=108)

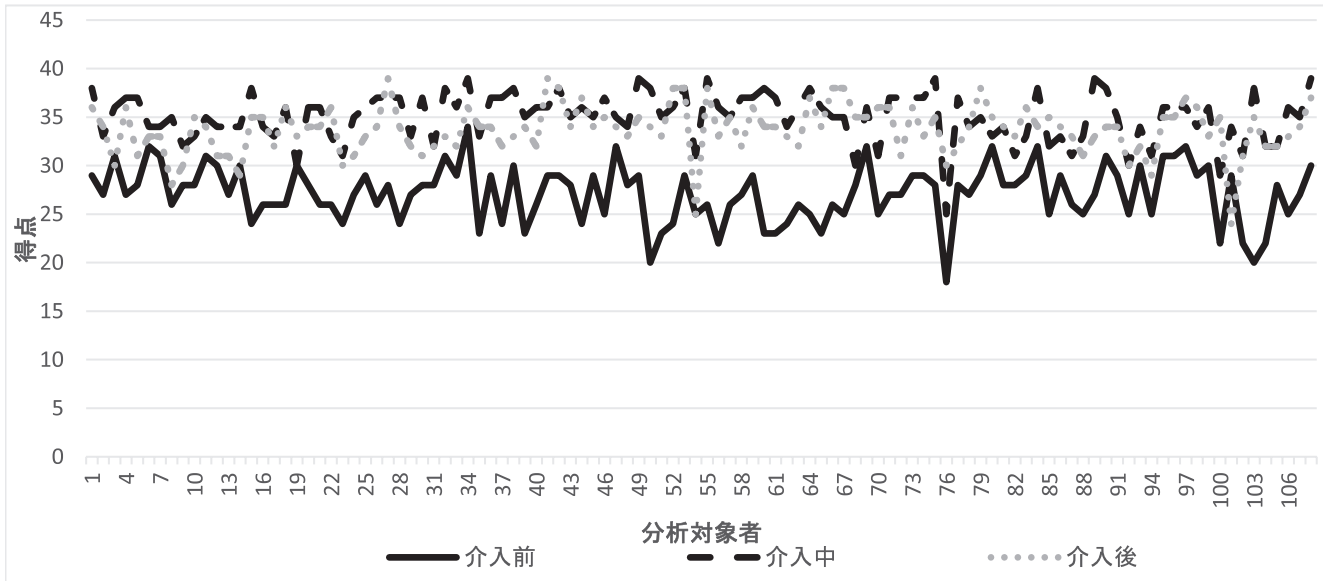


Figure 2 乳児保育実践学習評価の個人の得点の推移

乳児保育実践学習と乳児保育効力感との関連

1. 乳児学習評価のクラスター分析

乳児保育実践学習の一人一人の乳児学習評価の得点を細かく知るために、乳児保育実践学習の介入前・介入中・介入後の3回に分けて行った。測定した3回の得点に対し、クラスター分析（ユークリッド平方距離によるWard法）を行った。クラスターを3つから6つに設定し分析した結果、解釈可能性を考慮して4クラスターを採用した。各クラスターの得点の平均値を、0を基準として標準化し、Figure 3に示す。値が0以上であれば得点が高く、0以下であれば得点が高いことを表す。

クラスター1（24名：22.2%）は、3回の得点すべてが0以上の安定した値であり、介入後が特に高く得点が伸びていたため「得点成長群」と命名した。

クラスター2（46名：42.6%）は、介入間と介入後の得点が0以下で、介入中の得点が0以上だったため、「継続困難群」と命名した。

クラスター3（19名：17.6%）は、介入前の得点が0よりやや低い値を示し、介入中はすべての群の中で一番低い得点を示し、介入後は0以上の値であったため「挫折復活群」と命名した。

クラスター4（19名：17.6%）は、介入前の得点が他の群すべての中で一番高く介入中は0よりやや低い値を示し、介入後は低い得点を示したので「実力不発群」と命名した。

各クラスターと乳児保育効力感の各下位尺度との関連

Table3は、クラスターの各群における介入前の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点を表したものである。各クラスター（群）と介入前の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、介入前の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び1、困難希求1、適切養護1、言語的賞賛1）の得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、すべての群で、有意な差が見られなかった。

Table4は、クラスターの各群における介入中の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点を表したものである。各クラスター（群）と介入中の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、介入中の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び2、困難希求2、適切養護2、言語的賞賛2）の得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、「得点成長群」は、介入中の「適切養護2」の平均得点が3.65、「継続困難群」は平均得点が3.20と5%水準で有意な差が認められた（ $F(3, 104) = 3.23, p < .05$ ）。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ「得点成長群」は、「継続困難群」よりも得点が高まることになった。

Table5は、クラスターの各群における介入後

の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点を表したものである。各クラスター（群）と介入後の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、介入後の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び 3, 困難希求 3, 適切養護 3, 言語的賞賛 3）の得点を従属変数とする 1 要因の分散分析を行った。その結果、「得点成長群」は、介入後の「適

切養護 3」の平均得点が 3.78, 「実力不発群」は平均得点が 3.44 と 10%水準で有意な傾向で有意であった ($F(3, 104) = 2.35, p < .10$)。他の群では、有意な差が見られなかった。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ「得点成長群」は、「実力不発群」よりも得点が高まる傾向があることが明らかになった。

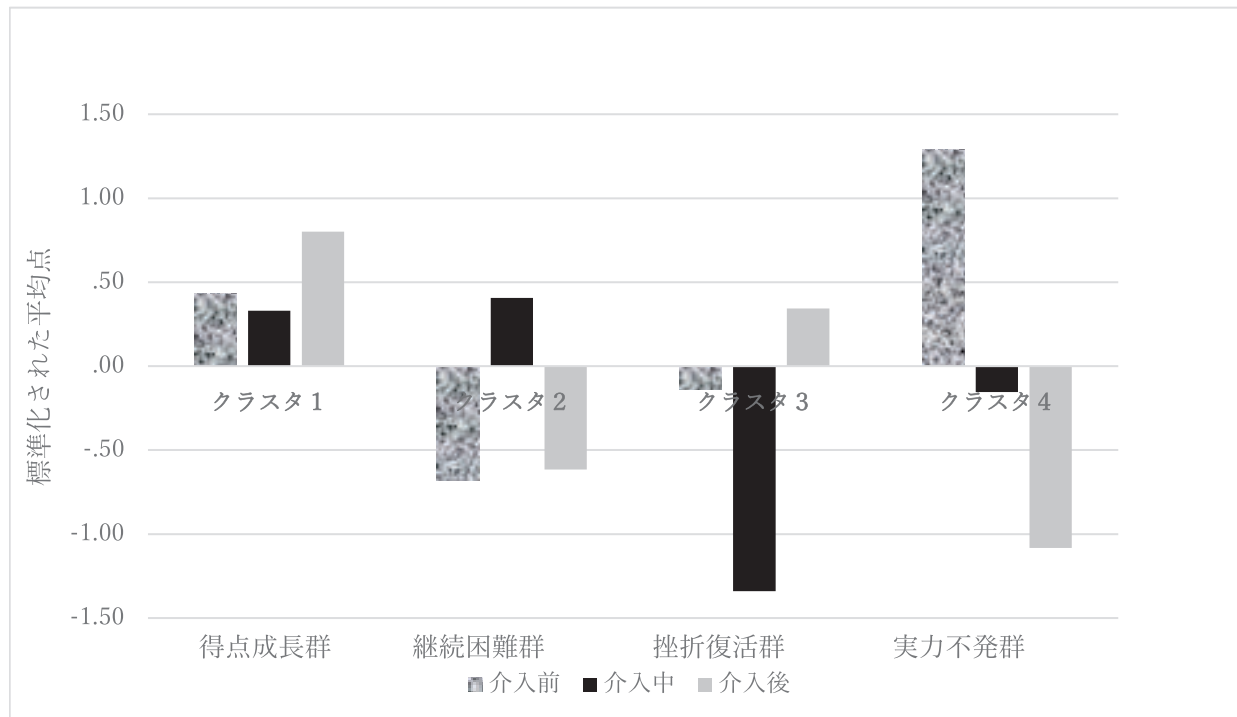


Figure 3 各乳児保育実践学習評価得点の標準化された平均点

Table 3 各クラスター群と乳児保育効力感下位尺度の介入前の平均得点の分散分析 ($N=108$)

		クラスター 1	クラスター 2	クラスター 3	クラスター 4	F	多重比較
		得点成長群	継続困難群	挫折復活群	実力不発群		
		(n=24)	(n=46)	(n=19)	(n=19)		
表現遊び 1	M	2.06	2.20	1.78	2.12	1.91	
	SD	.72	.64	.66	.56		
困難希求 1	M	3.47	3.42	3.31	3.57	.87	
	SD	.38	.50	.55	.52		
適切養護 1	M	2.87	2.75	2.59	.54	.74	
	SD	.59	.60	.64	.54		
言語的賞賛 1	M	3.44	3.30	3.07	3.26	1.20	
	SD	.59	.58	.77	.72		

Table 4 各クラスター群と乳児保育効力感下位尺度の介入中の平均得点の分散分析 ($N=108$)

		クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	F	多重比較
		得点成長群	継続困難群	挫折復活群	実力不発群		
		(n=24)	(n=46)	(n=19)	(n=19)		
表現遊び 2	M	3.04	3.05	3.01	2.91	.22	
	SD	.58	.72	.67	.61		
困難希求 2	M	3.80	3.76	3.68	3.79	.37	
	SD	.44	.39	.42	.36		
適切養護 2	M	3.65*	3.20*	3.59	3.36	3.23	2<1
	SD	.60	.72	.57	.54		
言語的賞賛 2	M	3.80	3.84	3.64	3.76	.70	
	SD	.52	.48	.57	.49		

* $p<.05$

Table 5 各クラスター群と乳児保育効力感下位尺度の介入後の平均得点の分散分析 ($N=108$)

		クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	F	多重比較
		得点成長群	継続困難群	挫折復活群	実力不発群		
		(n=24)	(n=46)	(n=19)	(n=19)		
表現遊び 3	M	3.10	3.11	2.99	2.92	.49	
	SD	.64	.57	.81	.54		
困難希求 3	M	4.00	3.91	3.81	3.83	.71	
	SD	.34	.43	.67	.49		
適切養護 3	M	3.78 [†]	3.47	3.55	3.44 [†]	2.35	4<1
	SD	.48	.47	.68	.40		
言語的賞賛 3	M	4.00	3.91	3.76	3.87	.77	
	SD	0.37	0.47	0.67	0.63		

[†] $p<.10$

IV. 考 察

乳児保育実践学習評価の分析

乳児学習評価の得点に差があるかどうかを検討するために、時期〔介入前 (2)-1, 介入中 (2)-2, 介入後 (2)-3〕を独立変数とした 1 要因被験者内分散分析を実施した。その結果、時期の主効果が認められた。多重比較の結果、すべての時期にお

いて 1%水準で有意であり、介入前から、介入中にかけて、値が高く向上し、介入中から介入後にかけて緩やかに得点が低まった。介入前の得点よりも、介入後の得点は、高い値を維持していた。乳児保育に関する実践的なものは、身についたと推察されるが、時間が経過することで、学習したことはある程度は定着しつつも、記憶が曖昧にな

り、得点が緩やかに低下する結果を示していた。

乳児保育実践学習と乳児保育効力感との関連

乳児保育実践学習の一人一人の乳児学習評価の得点を細かく知るために、乳児保育実践学習の介入前・介入中・介入後の3回に分けて行った得点に対し、クラスター分析（ユークリッド平方距離によるWard法）を行った。その結果、クラスター1：「得点成長群」（3回の得点すべてが0以上の安定した値であり、介入後が特に得点が伸びていた。）・クラスター2：「継続困難群」（介入間と介入後の得点が0以下で、介入中の得点が0以上だった。）・クラスター3：「挫折復活群」（介入前の得点が0よりやや低い値を示し、介入中はすべての群の中で一番低い得点を示し、介入後は0以上の値であった。）・クラスター4：「実力不発群」（介入前の得点が他の群すべての中で一番高く介入中は0よりやや低い値を示し、介入後は低い得点を示した。）の4つのクラスターを採用した。

各クラスター（群）と介入前の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、介入前の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び1、困難希求1、適切養護1、言語的賞賛1）の得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、すべての群で有意な差が見られなかった。

各クラスター（群）と介入中の乳児保育効力感の各下位尺度の平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、介入中の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び2、困難希求2、適切養護2、言語的賞賛2）の得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、「得点成長群」は、介入中の「適切養護2」の平均得点が3.65、「継続困難群」は平均得点が3.20と5%水準で有意な差が認められた（ $F(3, 104) = 3.23, p < .05$ ）。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ「得点成長群」は、「継続困難群」よりも得点が高まることになった。他の群では、有意な差が見られなかった。

各クラスター（群）と介入後の乳児保育効力感の各下位尺度平均得点に差があるか検討するために、各クラスター（群）を独立変数、介入後の乳児保育効力感の各下位尺度（表現遊び3、困難希求3、適切養護3、言語的賞賛3）の得点を従属変

数とする1要因の分散分析を行った。その結果、「得点成長群」は、介入後の「適切養護3回目」の平均得点が3.78、実力不発群は平均得点が3.44と10%水準で有意な傾向であった（ $F(3, 104) = 2.35, p < .10$ ）。他の群では、有意な差が見られなかった。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ「得点成長群」は、「実力不発群」よりも得点が高まる傾向があることが明らかになった。

以上から、介入中においては、成績の良かった「得点成長群」は、成績が伸びなかった「継続困難群」よりも「適切養護2回目」の得点が高まり、介入後においては、成績の良かった「得点成長群」は、実力の発揮できなかった「実力不発群」よりも「適切養護3回目」の得点が高まる傾向が明らかになった。実践カード学習を活用した乳児保育実践学習の成績が良かった群は、乳児保育効力感の適切養護が上昇したことが明らかになり、乳児保育実践学習は、意味があったといえる。

V. 結論

乳児保育の授業において、演習による実際の保育をイメージしやすい保育内容や指導の充実・工夫が必要と考え、A4サイズの手書きのカラーイラスト入り「乳児保育実践カード」⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾を作成した。乳児保育の授業が、視覚的にも分かりやすく興味のある内容として能動的に経験できることで、保育スキルを高めることに繋がると考え試みた。

乳児保育実践学習の効果測定である乳児学習評価において、介入前から、介入中にかけて、値が向上し、有意に得点の増加が認められ、乳児保育のスキルを高められたことが明らかになった。

一方、保育者能力向上の観点から、田辺（2011）⁹⁾は、保育者効力感という概念が保育者の資質向上について多岐にわたる保育の専門性の実践において、有効な要因としていることを報告している。このことから、学習することだけではなく、実習や保育の現場において、必要な保育行為が上手くできるかどうかという見通しや予測の認知として、保育者効力感を高めることが大切であると考えられる。

介入中においては、成績の良かった「得点成長群」は、成績が伸びなかった「継続困難群」よりも「適切養護2回目」の得点が高まり、介入後においては、成績の良かった「得点成長群」は、実

力の発揮できなかった「実力不発群」よりも「適切養護3回目」の得点が高まる傾向が示された。このことから、実践カード学習を活用した乳児保育実践学習の成績が良かった群は、乳児保育効力感の適切養護が上昇したことが明らかになった。今後の保育者養成において、リアルな体験がますます重要になってきている。アクティブラーニング、資質能力等各科目においても、学びの質を高め、一人ひとりが力をつけて次に繋げていく、保育者としての資質向上が不可欠である。

謝辞

聖徳大学大学院の鈴木由美先生には、いつも熱心なご指導とともに温かい励まし、多大なる示唆を頂き、支えていただきましたことを厚く御礼申しあげ、心より感謝いたします。

また、多くの学生、卒業生の皆様に調査に協力していただきましたことを感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 加藤房江. 「乳児保育効力感(自作) 尺度の作成」 埼玉純真短期大学紀要, 2018, 11, pp 15-25.
- 2) 加藤房江. 「保育専攻学生による乳児保育実践学習と乳児保育効力感との関連1 ―乳児保育実践カードと乳児保育実践学習評価を作成して―」 埼玉純真短期大学紀要, 2021, 14, pp 1-22.
- 3) 厚生労働省. 保育所保育指針解説, フレーベル館, 2008.
- 4) 迫田圭子・天野珠路・岡本美智子・海沼和代・高野陽・増田まゆみ・山田紀代美・粕谷彩子・小川真澄・社会福祉法人あすみ福祉会 茶々保育園グループ(編) 養成校と保育室をつなぐ理論と実践 新訂 見る・考える・創り出す 乳児保育 萌文書林 2014.
- 5) 川原佐公・古橋紗人子 赤ちゃんから学ぶ「乳児保育」の実践力―保育所・家庭で役立つ―

保育出版社 2012, pp.46-135.

- 6) 松本峰雄 乳児保育演習ブック ミネルヴァ書房 .2016, pp.43-227.
- 7) 野中千都 「乳児保育Ⅱ」の教授内容に関する一考察～学生によるアンケート調査より～ 西南女学院大学紀要 2008, 12, pp.146-172.
- 8) 船越利代子 “乳児保育” 授業における課題―保育所実習アンケート分析から― 筑波国際短期大学紀要 2010, 38, pp.1-15.
- 9) 田辺昌吾 心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について―「健康」保育者効力感の検討― 四天王寺大学紀要, 2011, 51, pp.175-185.
- 10) Bandura, A. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, Psychological Review, 1977, 84, pp.191-215.
- 11) 田中幸代 同学年モデルの観察および観察されるモデルとなることが、大学生の保育技術の「準備」・「自己効力感」に及ぼす効果 教育心理学研究, 2006, 54, pp.408-419.

付記

この論文は、聖徳大学大学院の卒業論文を加筆修正したものである。